

国分一太郎『わたくしのなかの母と子』における 学校教育と母子関係の変容

School and Transformation of Mother-Child Relationship in
Ichitaro Kokubun's *Watakusi no Naka no Haha to Ko*

安 部 貴 洋

要約 本論の目的は、国分一太郎『わたくしのなかの母と子』を手がかりに、近代学校教育が母子関係にどのような変容をもたらしたのかを考察することにある。近代学校教育の始まりとともに「新しい母親」が誕生する。「新しい母親」は、学校教育を支える家庭教育の中心に位置づけられ、子どもをよく育てるために学び、子どもを自ら教えるような母親を指している。このような「新しい母親」が学校教育の普及とともに一般化する。だが、その過程で母と子どもに見られた生活と経験の共有、同一化が失われることになる。

は じ め に

国分一太郎(1911-1985)¹は、1965年に『わたくしのなかの母と子』と題する著作を刊行している。その内容は『わたくしのなかの母と子』という題名が示しているように国分の母「デン」とのエピソードを綴ったものである。そのためか、この著作が研究対象として取り上げられることはなかった²。だが、この著作が興味深いのは学校教育を受けることのなかった母と学校教育のなかで育った子どもとの関係を描き出している点にある。デンは小学校一年のみ学校に通い、その後子守奉公に出る。そのため文字は1234といった算

用数字と、カタカナしか知らなかったという。これに対して国分は師範学校を優秀な成績で卒業し、小学校の教員にまでなる。学校教育を受けることのなかったデンが国分にどのような教育を行ってきたのか。また、国分とどのような関係をつくりあげたのか。本論が考察したいのは、これらの点である。

これらの点を明らかにするために、本論ではまず国分の言う「新しい母親」を明らかにしたい。国分は1960年代の母親を「新しい母親」と呼び、デンのような「伝統のなかの母」とは対比的に捉えている。したがって、「伝

統のなかの母」を明らかにするためには「新しい母親」を明らかにすることが重要になる。だが、「新しい母親」とは何か、国分は明確にしていない。ただ、『わたくしのなかの母と子』が書かれた1960年代にはいわゆる「教育ママ」と呼ばれる様々な「ママ」が登場する。1960年代のママを通してみると、国分の言う「新しい母親」とは学校教育を中心に子どもとの関係を形成している母親であることが明らかになる。だが、このような母親は必ずしも新しいわけではない。その誕生は明治時代にすでに見られる。「新しい母親」

は学校教育とともに誕生するのである。『わたくしのなかの母と子』が書かれた1960年代とは、学校教育とともに誕生した「新しい母親」が一般化し始めた時代にほかならない。このような時代背景の中で捉えるとき『わたくしのなかの母と子』は、単に国分の個人的なエピソードにとどまるものではない。近代学校教育と学校教育以前の教育の関係を母と子という観点から問い直すものとしてあらわれてくるのである。ここに本論文の意義がある³。

1 新しい母親

(1) 「新しい母親」と1960年代の「ママ」

国分は『わたくしのなかの母と子』において、デンを「生活者」としての「母」「伝統のなかの母」と呼び、「新しい母親」と明確に区別している。国分は両者の相違を「新しい知識、新しい考え方」にあると説明する⁴。「新しい知識、新しい考え方」を持っているのが「新しい母親」である。だが、「新しい知識、新しい考え方」とは何か。この点、国分はこれ以上の説明を加えてはいない。ただ、国分が『わたくしのなかの母と子』を書いた⁵1960年前後は様々な「ママ」が登場した時代であることはよく知られている。1950年代半ばには「心理ママ」「心理学ママ」といった言葉がマスコミにぎわせている。「心理ママ」「心理学ママ」とは、心理学に過剰にのめり込み、心理学書に書いてある通りに子どもを育てようとする母親である。また、知能検査の結果に過剰に反応し、有名幼稚園に

入れるために子どもに知能検査の練習をさせる「IQママ」という言葉も登場する。さらに1960年代初めには「水道ママ」という言葉も登場している。「水道ママ」とは、数学者の遠山啓が創案した算数の指導方法である「水道方式」を自ら勉強し、子どもの担任教師にも「水道方式」を進めるような母親を指している⁶。

このような母親が1960年前後には登場している。これらの母親を特徴づけているのは、心理学や水道方式といった教育に関する新しい知識を学んでいる点にある⁷。これまでの母親が伝統的な育児や教育の方法に関する知識を持っていたのに対して、様々なママは心理学や教育方法に関する知識を学んでいる。だが、何のために学ぶのか。それは子どもの教育のためにほかならない。心理学や教育方法を学ぶことによって、子どもをよく育てようとするのである。桜井哲夫は「六〇年代

という時代は、高度経済成長の企業戦士として〈父〉を奪われた、家族成員数の減少してゆく核家族のなかで母親と子どもとの濃密なつながりが、〈学校〉を中心にして形成された時代であった⁸」と言っている。桜井は、1960年代の様々なママが学校教育を中心として子どもと関係を形成したと言っている。国分の言う「新しい母親」は、1960年前後に登場した様々なママを指していると言える。

（2）歴史のなかの「新しい母親」

このように「新しい母親」は学校教育を媒介に子どもとの関係を形成している。そのことは歴史にも明確に表れている。このことを明らかにしているのが小山静子『子どもたちの近代 学校教育と家庭教育』⁹である。小山は、「新しい母親」の歴史を次のように説明している。まず、江戸時代には現在イメージされているような母親は存在しなかったという。江戸時代には「いえ」の跡継ぎである子どもの教育は家長の責任であり、意識的に教育が行われていた武士の場合でもそれを行っていたのは父親であった。また、江戸時代に多数出版された女訓書においても説かれていたのは理想的な妻や嫁の姿であり、教育する母親などではなかったという。だが、明治に入ると次第に教育する母親への関心が高まることになる。明治初期には、学校教育の始まりとともに、国民形成のために教育する母親に関心が集まるようになる。そして教育する母親の姿は、明治二十年代の新しい家族としての「家庭」の登場とともにより明確になる。新しい家族としての家庭は子どもへの愛情と「男は仕事、女は家庭」といった近代

的な役割分業を特徴とする。このような家庭論とともに、家事や育児に専念し、子どもの教育に積極的な関心を示す母親が語られ始めるのである。このように「新しい母親」は学校教育とともに誕生する。だが、この段階では両者の関係はそれほど明確になっていない。家庭教育が学校教育とどのような関係にあるのか、そのことが明確になるのは明治三十年代のことである。明治三十年代前半は小学校への就学率が高まり、義務教育が軌道に乗り始める時代である。このような時代背景のもとで、学校教育を充実したものとするために家庭教育、母親による教育が論じられるようになるのである。すなわち、これまで明確に関係づけられることのなかった学校教育と家庭教育とが、義務教育の定着とともに学校教育を支えるものとしての家庭教育という位置づけが明治三十年代にはなされるのである。そして、十分な家庭教育を行うためには母親もまた学校教育を受けることが必要とされた。すなわち、新しい母親になるためにはそれまで伝えられてきた育児や教育ではなく、学校教育を学ぶことを必要とされたのである。このように明治三十年代には、学校教育を学び、学校教育を支える母親が盛んに論じられるようになる。ただ、このような母親が実体化するのは第一次世界大戦後である。第一次大戦後の都市中間層が新しい家族としての家庭、教育する母親を実体化させていくのである。そして、このような家庭、母親が一般化するのが1960年代にほかならない。

このように「新しい母親」は、明治初期の学校教育の始まりとともに誕生し、学校教育を支えるものとして位置づけられてきた。そし

て、学校教育を中心に子どもとの関係を形成してきた。これが国分の言う「新しい母親」である。だとすれば、「伝統のなかの母」とは学校教育を媒介することなく子どもとの関

係を形成する母ということになる。だが、それはどのような母親なのか。そして、子どもとどのような関係を形成するのか。

2 伝統のなかの母

(1) デンと学校教育

国分の母デンは、1888年山形県に生まれる。小学校に一年通った後、よその家に子守奉公に出る。そのため文字は算用数字とカタカナしか知らず、ヒラガナは読めなかったと言う。したがって、デンが国分に学校の勉強を教えることはほとんどなかった。国分は書いている。「小学二年生となると、母は何も教えてくれなかった。教える資格はないと観念していたせいもあろうし、じじつ教えることはできかねたわけだ。したがって、わたくしは(あるいは弟妹たちも)勉強は自分でするものと思っていた。……「勉強は学校の先生からならうものだ。」母はよくこういった。¹⁰⁾」このようにデンは学校に通うことも勉強を教えることもなかった。だが、デンは学校に対してどのような感情を抱いていたのか。『わたくしのなかの母と子』の「スハン」と題する一章にその様子が描かれている。「スハン」とは、東北方言で「師範」のことである。国分は「スハン」で、様々な偶然から師範学校に入ることになった「いきさつ」を書いている。小学校高等二年の秋、担任から師範学校に入らないかという話がある。長男である国分は床屋を継がなければならない、経済的にも困難である。そのような状況のなかで、デンは「スハンなどさ入れられたら、どんなによいだろ

うになあ¹¹⁾」と言ったという。また、国分の弟が床屋を継ぐことを承諾した時の様子を次のように書いている。「『正二郎がなあ、おれ床屋になるから、あんつあ、スハンさはいればよいって言ったよ』……「ほんとに、そういったのか」と声はずませて、母にたずねた。「うん。言ったよ。」「あっかあが、きいてみたのか」母はしずかにうなずくようでもあり、それはどっちでもよいではないかと、わたくしの問いをさえぎるようでもあった。「あんつあが、先生になればよいというから、お前、そのつもりで、はいればよいべ」なおも、母は、こうことばをつなぎ、なにかを期待するまなざしで、わたくしを見た。¹²⁾」デンの「スハンなどさ入れられたら、どんなによいだろうになあ」と言う言葉、わたくしを見る「なにかを期待するまなざし」そこにデンの学校に対する憧れにも似たまなざしを見て取ることができる。ただ、このようなまなざしはデンに限られているわけではない。国分の祖母もまた「その、スハンていうのは、先生様になるんだべ。そうしたら、おれ、毎朝早く起きて、停車場さ出してやる¹³⁾」と言っている。だが、この憧れは村の生活や教育への劣等感とともにある。「母のなんとかして、自分のムスコを、床屋でないものにしたいとのねがい¹⁴⁾」があったと国分は書いている。

学校教育に対する憧れと村の生活や村の教育に対する劣等感、このような感情はデンや国分の祖母に限られたものではない。なぜなら、明治以降の学校教育が、村の生活や村の教育を遅れたものとして位置付けることによって自らを浸透させてきたからにはほかならない。例えば、宮本常一は次のように書いている。「親たちも学校のことには口だししないのがあたりまえだとされたのである。多くの場合、学校教育は村の生活を野卑なものとするものとして指導している。たとえば言葉などでも、方言はすべてわるい言葉として否定せられた。唱歌はよいが、民謡はいけないとせられ、学校で盆踊りうたなど絶対にうたつてはならないものにせられていた。¹⁵」学校教育は村の生活を遅れたもの、悪いものとして位置付けることによって自らを普及させていく。デンに見られる学校に対する感情は、このような時代背景のなかで捉える必要がある。明治三十年代には、家庭教育は学校教育を支えるものとして位置付けられるが、対等なものとして位置付けられたわけではない。あくまでも学校教育が主として位置付けられたにすぎないのである。そして、このような状況は明治の初めから戦後まで続いていたと宮本は書いている¹⁶。

（2）教えることのない母

デンは「新しい母親」のように国分に何かを教えることはなかったと言う。母による教育というものが、意図的に「母が何かはたらきかけをして、それによって子どもの考えなり、性格なりがつくりあげられる¹⁷」ものだとすれば、デンは国分に教育を行わなかった。だがその一方で、国分は母の動作や行動が心

中深く影響を与え、考えかたや性格を形成していったという。「わたくしの場合は、母のほうから、はたらきかけようと考えて何かをしたのではない。が、そうであればあるほど、それが、わたくしの心で深く影響を与えて、わたくしの考え方なり心のありかたなりを、しだいに形成していった。いま「とつおいつしているところ」から、なにかを学びとった、というのなども、そのひとつである。¹⁸」このようなデンの教育を国分は「無言の教訓」と呼んでいる。また、「教訓ではない教訓」「教えごと・いいつけ」等をデンの教育として挙げている¹⁹。

① 無言の教訓²⁰

「無言の教訓」とは、デンの姿から国分が自然に何かを学び取ったことを言う。例えば、デンは床屋の道具をいつもキッチンと使いやすように並べていたという。「いま、わたくしが思いだしているのは、その道具類のことだが、それはお察しがつくように、いつも、キッチンとならんでいた。……いや、手にとりやすく、使いやすく並べておかねばならなかった。しかも、時どきは消毒をして、清潔な状態で並んでいなければならなかった。²¹」このようなデンの姿を見ているうちに国分もまたいつの間にか片付け好きになったという。国分は次のように言う。「母は店での習慣、床屋という、まことに順序をへたしごと、「はじめ」があって、「なか」があって、「おわり」のあるしごとの中で身につけた習慣、諸道具がすべて所定の場所に、つぎに使いやすいくところへ整理整頓してあることを、やむをえずつづけたところからくる身体の動き、それを「店」から「家庭」に移ったときにも、しだ

いにあらわしはじめた。たぶんそうにちがいない。それが、わたくしたち子どもに無言の教訓となったのにちがいない。²²⁾

② 教訓ではない教訓

教訓ではない教訓とは、デンの独り言が国分にとって教訓となったことを意味する。例えば、その姿を「おどけと本気」に見ることができる。「おどけと本気」とは、デンが仕事場の上司に対して冗談で言ったつもりが本気にとられ、蹴飛ばされ、怒鳴りつけられた話である。「何かあったのか」と尋ねる国分にデンはあったことをありのまま話し、自らの失敗を独り言のようにつぶやくのである。「「おら、オドケで言ったのに……」とつぶやいたとき、「そうだな、あつかあ」と思ったし、「オドケというのは、よいいなこんで言えないもんだなあ」とくりかえすとき、「そうだなあ、あつかあ」と、自分も考えこむ気持ちになった。²³⁾「オドケでと、ひょいと思ったのに……」「本気ではなかったのになあ……」こういうコトバをくりかえしながら、母は、その話をありのままに、わたくしたちに物語ってきかせるのだった。²⁴⁾だが国分は、ありのままの話と母の独り言のなかから、冗談と本気を使い分けることの必要という教訓を学ぶことになる。「「オドケと本気って、よく考えていて、しないとダメだったんだなあ」こうしんみりつぶやいても、それは、自分に言ってきかせるコトバとしてひびく。しかしながら、それはそのままに、わたくしたちの胸にひびく、教訓くさい教訓としてではなく、事実の物語りのなかの実感として、それがわたくしたちにひびく。教訓ではない教訓としてわたくしたちには受けとられる。²⁵⁾

③ 教えごと・いいつけ

「無言の教訓」「教訓ではない教訓」に見られるようにデンは、言葉によって国分に教えることはほとんどなかった。だが、時に「教えごと」をすることもあったという。父の留守中、踏み台に乗ったデンがめまいのため座敷に座り込んだことがあった。そのとき「もしも、誰もいないようなとき、おれが倒れたりしたら、まず隣の人にたのんで、それから医者を呼びにいかねければならないからな²⁶⁾」と言われたという。このことが国分の思い出せる「教えごと」のひとつであるという。また、母にひげをそってもらったとき「こりゃあ、うんとかたくなるひげだな。はえかたも、行儀わるくて、栗のいがみたいだ。おまえ、ほかの床屋にいったらな、二十銭か三十銭、よけいにおいて出ろ²⁷⁾」と言われたという。国分は次のように続けている。「自分のひよわなカミソリに、つよくこたえる、わたしのひげのごわさが、こうしたつぶやきによる「いいつけ」となったのであろう。²⁸⁾

このように国分はデンの教育の方法として「無言の教訓」「教訓ではない教訓」「教えごと・いいつけ」を挙げている。だが、これらの方法は何を意味しているのか。これらの方法にどのような共通性があるのか。

これらの方法の中心にあるのは「教訓」である。「教訓」に対する姿勢にデンの方法の特徴がある。一般に「教訓」とは、教え諭すこと、教え諭した言葉そのものを指している。だが、国分にとって「教訓」の意味はそれだけにとどまらない。国分にとって教訓とは特に「一般化」を意味している。国分は書いている。「「オドケと本気は、時により、情況に

より、人によって区別しなければならないものなんだよ」とは母は言わなかった。母にしてみれば、このように一般化したり、教訓めくものとしては、口にだすことができえなかったのだろう。²⁹「一般化」とは、ここで生活や具体的な経験を離れることを意味する。生活や具体的な経験から離れるとき、それは教訓となる。言い換えれば、教訓とは生活や具体的な経験から離れた言葉を意味している。確かに、「無言の教訓」はデンの生活、経験そのものである。国分は、デンの行動・動作から自然に学んでいくのである。また、「教訓ではない教訓」「教えごと・いいつけ」もデンの生活や経験から離れることはない。「教訓ではない教訓」で語られる言葉は、ありのまま、自分の失敗を繰り返しているだけである。そして、「教えごと・いいつけ」もデンの生活、経験にぴったりとくっついている。ここにデンの教育の特徴がある。デンは、生活や経験にとどまろうとする。自らの生活や経験を越えて語ろうとはしない。

だが、デンが自らの生活、経験にとどまり続けようとするとき、国分に大きな影響を与えている。すでに見たように「オドケと本気」において国分は次のように書いている。「『オドケと本気って、よく考えていて、しないとダメだったんだなあ』こうしみりつぶやいても、それは、自分に言ってきたコトバとしてひびく。しかしながら、それはそのままに、わたくしたちの胸にひびく、教訓くさい教訓としてではなく、事実の物語りのなかの実感として、それがわたくしたちにひびく。教訓ではない教訓としてわたくしたちには受けとられる。³⁰」デンは自分に言って聞かせている。だが、それは国分の胸にも実感とし

て響いている。そして、この影響は大人になっても残ったという。「オドケと本気とを、げんに区別する思いで、外へだすこと、他人の受けとりかたというものには、思いがけぬものが存在すること。子どものときに、母の話から受けたこの教訓は、いまもわたくしの心のなかから消え去らない。³¹」だが、自分の経験にとどまっているデンの姿勢が、なぜこれほど深い影響を与えるのか。

この問題の考察には、あずまひろし東洋の「滲み込み型 (osmosis model)」が参考になる。滲み込み型は、「環境が整っていてよいモデルがあれば、子どもは「自然に」学ぶという前提に立つ³²」。その特徴は、教える者と学ぶ者の役割がはっきりしていない点にあると言う。また、言葉による伝達が少ないことも特徴である³³。デンと国分の関係が滲み込み型であることは言うまでもない。だが、このような関係が成立するためには「教える者と学ぶ者の両者を隔てる距離が少なく、いわば薄い膜ひとつで隔てられているという意味での同一化 (identification) が前提となる³⁴」と東は言う。東の言う同一化を前提とすると、デンの影響の理由が明らかになる。すなわち、同一化においては母の経験が同時に国分の経験でもある。母の悲しみは国分の悲しみでもある。言葉もまた母の言葉であると同時に、国分の言葉でもある。国分の胸に響いてくる理由はここにある。そして、同一化において経験にとどまろうとするデンの姿は重要なものとなる。なぜなら、デンが経験の外に出ようとするれば同一化が失われるからにほかならない。教訓や学校教育における知識の問題点はここにある。教訓と同様に、学校教育における知識は教える者と学ぶ者の外側に対象化されて

いる³⁵。したがって、教訓も学校教育における知識も語られることによって、母と子を支える同一化の過程を失わせることになる。デ

ンが教訓を語ることのなかった意味はここにある。

お わ り に

本論では国分一太郎『わたくしのなかの母と子』を手がかりに、学校教育と母子関係の変容を考察してきた。「伝統のなかの母」とは、生活や経験にどこまでもとどまる母親であった。生活や経験を離れて教訓を語ることはない。母が生活や経験にとどまるとき、子どももまた生活や経験にとどまることになる。このとき母の感情や言葉が子どものものとして現れることになる。このような関係を東は同一化と言っている。同一化の状態にあるとき、母の動作や行動が大きな影響を与えることになる。また、子どもは自らの生活や経験を抜け出し、自ら教訓を学ぶことがある。生活や経験から自ら教訓を紡ぎだすことによって、教訓は自らの内に深く刻み込まれる。「伝統のなかの母」は、子どもとこのような関係を形成する。だが、学校教育の始まりとともに「伝統のなかの母」は「新しい母親」へと変容する。「新しい母親」とは、学校教育を支える家庭教育の中心に位置づけられ、子どもの教育のために新しい知識を学び、子どもに自ら教えようとする母親である。だが、「新しい母親」と子どもの関係において、生活や経験の共有、同一化は失われることになる。知識を教えようとするとき、そのときすでに生活や経験の外にいるからにはかならない。東の言うように、知識は教える者と学ぶ者との外側に対象化されているのである。また、

このとき知識が外から与えられるものとして現れることになる。「伝統のなかの母」と子の関係において見られるような深い影響が与えられることはない。このように学校教育とともに始まる「伝統のなかの母」から「新しい母親」への変容は、生活や経験の共有、同一化を失わせ教訓や知識が胸に響く機会をも同時に失わせることになったのである。

本論では学校教育と母子関係の変容の問題を、国分一太郎『わたくしのなかの母と子』を手がかりに考察してきた。したがって、本論で行った考察がどこまで一般化できるか疑問はある。今後、より広範な文脈の中でデンと国分に見られるような関係を検証する必要がある。また、「新しい母親」の行方も問題になる。現在の母親が「新しい母親」の延長線上にいることは言うまでもない。だが、時代とともにどのような変容を被っているのか。そして、現在の母親が子どもとどのような関係を形成しているのか。さらに、生活綴方との関係も問題になる。周知のように、国分は生活綴方の代表的論者である。デンとの関係が国分の生活綴方にどのような影響を与えたのか。デンとの関係から生活綴方を問い直すとき、限られた文脈の中で論じられてきた生活綴方の問題をより広範な文脈のなかで論じることが可能になる。これらのことが今後の課題である。

- ¹ 山形県に生まれる。師範学校を卒業した後、小学校の教師として綴方指導にあたる。戦後は、教育評論、児童文学、作文教育の実践・研究を行う。戦後新教育批判がよく知られている。
- ² もっとも国分一太郎研究そのものがほとんどなされていないのが現状である。まとまったものとしては、津田道夫『国分一太郎 抵抗としての生活綴方運動』（社会評論社、2010年）がある。ただ、この著作は題名が示すとおりに北方性生活綴方運動に焦点をあてたものである。津田は「あとがき」で次のように書いている。「本書は、いうまでもなく、国分一太郎と、北方性生活綴方運動の展開と中味、そして、それに対する弾圧事件と、その本質などを、国分の同志たちの動向をふくめて語りおろし、いま教育反動化が進行するなかにおいて、それに対する抵抗のための素材として世に問うたし、問うものである」（373頁）。
- ³ 母子関係に関する研究の多くは心理学の分野で見られる。だが、そこで論じられている親は「新しい母親」であるように思える。例えば、柏木恵子・高橋恵子編著『発達心理学とフェミニズム』（ミネルヴァ書房、1995年）において、柏木恵子は心理学における研究の多くが、親子関係と言いつつも子どもの発達のみを問題としていること、親と言いつつも母親のみを取り上げていることが多いと言っている。このことは、子どもを教育するのが母親であり、母親は子どもの発達に関する正しい知識をもっているべきであると言う前提があるように思われる。本論は、むしろこのような母親像を問い直すことに目的がある。
- ⁴ 国分一太郎『わたくしのなかの母と子』（百合出版、1965年）、6頁。
- ⁵ 『わたくしのなかの母と子』は、平湯一仁編集発行の雑誌『母と子』に、1962年12月号から64年11月号まで掲載したものをまとめたものである。
- ⁶ 他に「キャラメル・ママ」という言葉も登場している。東大闘争の中で、子どもを心配した東大生の母親が学生や教授にキャラメルを配ったことから「キャラメル・ママ」と呼ばれるようになる。
- ⁷ 戦後のアメリカの育児方法の影響も忘れることはできない。
- ⁸ 桜井哲夫『ことばを失った若者たち』（講談社現代新書）、84頁。
- ⁹ 小山静子『歴史文化ライブラリー 143 子どもたちの近代 学校教育と家庭教育』（吉川弘文館、2002年）、96-176頁。
- ¹⁰ 国分一太郎『わたくしのなかの母と子』、3-4頁。
- ¹¹ 同上、202頁。
- ¹² 同上、208頁。
- ¹³ 同上、209頁。
- ¹⁴ 同上、202頁。
- ¹⁵ 宮本常一『宮本常一著作集 8』（未来社、1969年）、50頁。
- ¹⁶ 同上、50頁。
- ¹⁷ 国分一太郎『わたくしのなかの母と子』、2頁。
- ¹⁸ 同上、2頁。
- ¹⁹ 国分一太郎「母の遺言」（大田堯・他編『国分一太郎文集9 北に生まれて』新評論、1983年）
- ²⁰ 他に「実物の教訓」という言葉も用いている。
- ²¹ 国分一太郎『わたくしのなかの母と子』、14頁。
- ²² 同上、17頁。

²³ 同上、28-9 頁。

²⁴ 同上、29 頁。

²⁵ 同上、29-30 頁。

²⁶ 同上、5 頁。

²⁷ 大田堯・他編『国分一太郎著作集 9 北に生まれて』、58-9 頁。

²⁸ 同上、59 頁。

²⁹ 国分一太郎『わたくしのなかの母と子』、29 頁。

³⁰ 同上、29-30 頁。

³¹ 同上、30 頁。

³² 東洋『日本人のしつけと教育 — 発達の日米比較にもとづいて —』（東京大学出版会、1994 年）、114 頁。

³³ 同上、115 頁。

³⁴ 同上、115-6 頁。

³⁵ 同上、120 頁。